いのちと地域を守る

体験聞き意識高まる

龍谷大学FAST代表　川端　麻友さん（21）

防災に取り組む学生団体「龍谷大学FAST」で、小学生から高齢者までを対象に自主防災の普及を図っている。消防士を目指していることもあり、地元消防団にも入って夜回りや放水訓練に参加している。

大阪府の実家に住んでいた高校生の時、大阪北部地震を体験した。災害が自分の身にも起こりうるという恐怖を味わった。日本は災害大国なのに、市民の防災意識が低いのが残念。どうすれば変えていけるのか、仲間と悩みながら考えている。

今回参加して、地域によって起こる災害も対策も違うことが分かった。いろんな体験を聞いて、私自身も意識が高まった。将来、自分たちの行動で一人でも多くの命を救いたい。

（京都新聞・目黒重幸）

めげずに伝え続ける

1・17希望の架け橋副代表　関西学院大1年　長谷川侑翔さん（19）

所属団体では、阪神淡路大震災後に生まれた世代が、被災者から経験を聞き取り、語り継ぐ活動に力を入れている。むすび塾では、語り部が被災者につらい記憶をよみがえらせる悩みがあるという報告があり、考えさせられた。

無理やり話を聞いたり、傷つけたりすることは避けたい。一方で、犠牲者の生きた証しを残したい。「若い人が語り継いでくれることが希望」と勇気づけてくれる遺族もいる。

阪神淡路大震災27年に合わせ、被災者にインタビューした動画を公開したが、再生回数が伸び悩んでいる。課題は多いが、活動しなければ始まらない。災害の教訓を発信し、悲しみが繰り返されないよう、めげずに伝え続けたい。

（神戸新聞・藤井伸哉）

家族のため備え確認

看護師（福井県永平寺町）　前川　莉沙さん（29）

小学6年だった2004年7月、福井豪雨で被災した。死者・行方不明者5人、重軽傷者19人、床上・床下浸水は1万3000棟を超え、自宅も床上浸水した。当時は防災の知識がなく、備えの大切さを痛感した。

現在は結婚し、子ども2人を育てながら看護師として働いている。福井豪雨の経験から水や食料を自宅に備蓄。当時、避難所などでずっと空腹だった記憶があり、長期保存できる子ども用の菓子も保管している。

むすび塾では、若い学生らが防災に関心を持ち、多方面で活動していることに刺激を受けた。家族を守るために備えを再確認し、看護師として災害時に少しでも貢献できるよう知識や技量を磨いていきたい。

（福井新聞・岩渕善郎）

地域助ける高校生に

高知国際高1年　畑山　莉晏さん（16）

小中学校で防災学習を受け、関心は高い方だったと思う。昨年11月には「高知県高校生津波サミット」に参加し、私なりに知識を深める努力はしてきた。

でも、むすび塾に参加して考えが変わった。同世代の高校生や大学生たちは団体を立ち上げてイベントを開催したり、語り部活動に取り組んだり。具体的な話をたくさん聞き、まだまだやることがあると刺激を受けた。ＳＮＳの情報をうのみにする怖さも理解できた。

普段、友達と防災の話はしない。災害が起きても「怖いね」って言うだけ。まずは周りの人と防災について考え、伝えていく活動から始めたい。防災の輪を広げて、地域を助ける高校生になりたい。

（高知新聞・村上和陽）

同年代の発表は刺激

宮崎県わけもん防災ネットワーク事務局次長　宮崎大2年　盛満　優雅さん（20）

大学入学後に宮崎県わけもん防災ネットワークへ入り、自作の防災ＤＶＤなどを児童養護施設などに贈っている。むすび塾では、雁部さんから「支援を受ける際、被災者であることを求められた」と聞き、当事者にストレスを与えないボランティア活動が大切だと感じた。

同年代の参加者による多様な防災の取り組み発表は、いい刺激となる。情報工学を学んでおり、仮想現実空間「メタバース」を用いた防災訓練など、ＩＴの活用にも興味が湧いた。

江戸時代に日向灘沖で発生した外所地震の供養碑について発表し、地域災害の伝承が防災・減災にもつながると再認識した。今後も県民の意識が高まるような啓発活動を心掛けたい。

（宮崎日日新聞・徳留亜弥）

■むすび塾に参加して

話し合いを終えて、誓いの言葉を記した紙を掲げる参加者たち

監修　減災・復興支援機構　　イラスト　さとうあけみ

むすび塾　オンライン開催

第104回巡回ワークショップ　@311メディアネット

同世代の知恵共有

河北新報社など全国の地方紙、放送局でつくる「311メディアネット」は2月11日、全国13カ所をオンラインで結び第104回防災ワークショップ「むすび塾」を施した。東松島市から大学生が中継で東日本大震災の語り部を務めたほか、各地で災害伝承や防災に取り組む10～30代の若者が災害の教訓を共有した。

全国の10～30代 意見交換

東松島市大曲小5年で被災した東北学院大3年の雁部那由多さん22が語り部を務めた。現地から地震発生後の避難行動をたどりながら、約5㍍の津波に襲われた大曲小での体験や震災伝承の課題を語った。

質疑応答でお年寄りに避難行動を促す方法を問われた雁部さんは「震災で逃げた理由に『気に掛けてもらったから』という回答があった。訓練などで、あなたにも助かってほしいと伝えることが大事だ」と答えた。

話し合いの前半は、各地の参加者がそれぞれの地域の自然災害と教訓を報告した。北見工業大（北海道）4年の林崎翔汰さん22は、2018年の北海道地震で全域停電ことを踏まえ、「冬に停電が起きて暖房設備が停止した時の対策を考える必要がある」と話した。

2023人が亡くなった昭和東南海地震を調べたのは名古屋大2年の坂上野々香さん20。将来の南海トラフ地震を念頭に「被害を減らすために過去の地震や津波を知ることが大切だ」と語った。

福井県永平寺町の看護師前川莉沙さん29は小学6年で、2004年の福井豪雨を体験した。「家族は床上浸水してようやく避難した。早めの行動が必要だった」と振り返った。

宮崎市南野では1662年に津波で200人が亡くなった外所地震の供養碑がある。50年おきに建立されている。宮崎大2年の盛満優雅さん20は「外所地震を広く伝える必要があるが、現状は認知度が高いとはいえない」と明かした。

助言者を務めた東北大災害科学国際研究所の今村文彦所長は、災害情報を入手する際の注意点として「善意で間違った情報が会員制交流サイト（SNS）で伝わる場合もある。公共の情報にアクセスし、確認してほしい」と求めた。

後半は頃の備えや防災活動の知恵を出し合った。子どもが防災に親しむアイデアについて、神奈川県金沢総合高1年の橋本玄さん16は「自分なら遊びながら学びたい。防災講習で防災運動会、防災キャンプなどに取り組んでいる」と話した。

静岡県焼津市のＩＴ企業サンロフトの小林大介さん30は「仮想空間のメタバースで自分の街や学校を作ることで、避難や消火といった活動もできる」とＩＴ技術の活用を呼び掛けた。

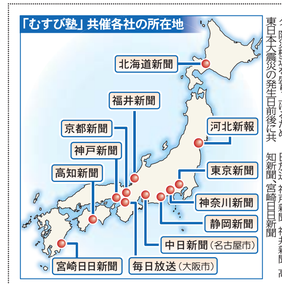
災害時の判断を養うカードゲーム「クロスロード」を紹介したのは関西学院大（兵庫県）1年の長谷川侑翔さん19。「頭を使うと印象に残るし、防災に向き合うきっかけにもなる」と述べた。

若い世代に防災をPRする工夫として、龍谷大（京都府）3年の川端麻友さん21は「食事宅配サービスのように目立つリュックで学生に防災グッズや非常食を届け、その様子を動画配信したら面白いのではないか」と提案した。

高知国際高1年の畑山莉晏さん16は、家族と被災時の集合場所を決めているほか、10円玉を持ち歩いている。「携帯電話の電池が切れても公衆電話を利用できる。行ったらすぐに公衆電話の場所を確認している」

「防災授業で小さな子どものいる家庭に、新聞紙の用意を勧めている」と話すのは、関西大（大阪府）2年の牧野葵さん20。「体に巻くと保温効果があるほか、簡易トイレに入れると防臭効果もある」と説明した。

最後に今村所長は「皆さんが呼び掛けだけでなく、実際に活動していることを頼もしく思った。活動を外国人にも広げ、話し合いで学び、気付いたことを実践してほしい」と激励した。



311メディアネット　河北新報社が展開する防災の巡回ワークショップ「むすび塾」を共催した全国地方紙、放送局が参加するネットワーク。回放送、神戸新聞、神奈川新聞、静岡新聞、中日新聞、福井新聞、高知新聞、宮崎日日新聞

参加社　北海道新聞、河北新報、東京新聞、神奈川新聞、静岡新聞、中日新聞、毎日放送、京都新聞、神戸新聞、高知新聞、宮崎日日新聞

通タイトルの特集や連載、番組を組む。今年が初回。

痛み抱え語る 誰かのために

東松島市大曲小の前で、震災当時の様子を話す雁部さん

東松島で被災 東北学院大3年　雁部那由多さん（22）

学校の体育館で大きな揺れに遭い、迎えに来た家族といったん帰宅した。自宅は物が壊れてめちゃくちゃだった。父の消防無線で津波が来ると知り、家族ともう一度学校に避難した。

校舎3階にいたが、靴を履き替えようと昇降口に下りると、校庭の奥に津波が見えた。避難してくる大人たちを入れるため扉を開けて待っていると、鉄砲水のような津波に襲われた。

壁につかまって流れに耐えた。大人は次々に膝丈の水の壁にのまれ、先頭の男性は自分に手を伸ばしてきたが流された。

目の前で流された人を「見殺しにした」と苦しんだ。3年後のシンポジウムで初めて語り、語ることで救われた。最初は自分のためだったが、いつしか「誰かの命を救う情報になるのなら」と思うようになった。

震災後、たくさんの支援物資をもらい、ボランティアも来た。その状況で被災者であることを求められている感覚があった。

地元は過去にも津波が来たが、20年前に造成された住宅地に伝承はなく自分も知らなかったに伝承は必要だ。語ることは痛みや苦しみを呼び起こす。危機感と矛盾を抱えながら語り部活動をしている。

（河北新報・渡辺ゆき）

多様な想定で訓練を　東北大災害研・今村文彦所長

■助言者から

東松島市の大曲地区を襲った津波は海だけでなく、大きく蛇行した川を遡上し、川からも来た。河川津波はどこでも発生する可能性がある。

都市では、河川や建物の間など意外な場所から突然大きな破壊力を持つ津波が来る。避難訓練を一つの想定だけにすると、判断を誤る可能性がある。

避難の重要な役割に率先避難がある。生の声で発信した状況を伝えるのは有効だ。それができる人を育成するのも大事だ。

地震、津波、水害とさまざまな災害が報告された。北海道地震のブラックアウトは日本で初の被害。停電は二次災害につながる可能性が高く、インフラの維持が被害軽減の鍵になる。

自助、共助、公助は備えの基本だが、防災に産業の力も重要だ。皆さんの活動もビジネスになるかもしれない。社会が必要とする防災に対価が支払われると、取り組みはさらに広がる。

参加者が報告した各地の自然災害

北海道地震
2018年9月6日に胆振地方中東部を震源に発生。マグニチュード（M）6.7で、震度7を観測。死者42人。全国初の全域停電が起きた。

東日本大震災
2011年3月11日に三陸沖を震源に発生。M9.0で震度7を観測。大津波が発生し、死者・行方不明者1万8423人。

2019年台風15号
9月9日未明に千葉県に上陸。千葉市で最大瞬間風速57.5㍍を観測。鉄塔や電柱が倒壊し、約64万戸が停電。神奈川県内でも土砂崩れなどの被害が出た。

2019年台風19号
10月12日に静岡県の伊豆半島に上陸後、関東、東北を縦断。記録的な豪雨で各地で河川が氾濫。土砂災害も発生し、死者113人、行方不明3人。

昭和東南海地震
1944年12月7日に南海トラフのうち紀伊半島東部の熊野灘を震源に発生。M7.9で最大震度6。最大9㍍の津波も発生。死者は1223人。

大阪北部地震
2018年6月18日に大阪府北部を震源に発生。M6.1で高槻市や茨木市で震度6弱を観測。ブロック塀の倒壊などで6人が死亡した。

阪神淡路大震災
1995年1月17日、兵庫県淡路島北部を震源に発生。M7.3で震度7を観測。死者6434人。家屋の倒壊、家具の転倒による犠牲が目立った。

福井豪雨
2004年7月18日に福井県で記録的な豪雨となった。土石流や堤防の決壊で被害が拡大。死者・行方不明者5人。全壊・半壊200戸。

2018年7月豪雨（西日本豪雨）
降り始めからの総雨量は高知県馬路村魚梁瀬で全国トップの1845㍉を観測。大規模な河川氾濫や土砂災害で全国で222人が亡くなった。

外所地震
1662年10月30日未明に日向灘で発生。M7.6で推定震度6強。津波が宮崎県から鹿児島県にかけて襲来。3800戸が倒壊し、約200人が死亡した。

■むすび塾に参加して

防災・減災のページ

情報発信が課題 実感

北見工業大4年　林崎　翔汰さん（22）

大学1年だった2018年9月、北海道寿都町にある実家に帰省していた際に、北海道地震を経験した。その後、大学の授業でこの地震で発生した液状化について学び、研究テーマに選んだ。

研究では、盛り土に振動を与えると想定以上の地盤沈下や土壌流出が起こることが分かっている。高速道路は津波からの緊急避難先にもなる。津波や揺れが盛り土に与える影響を解析し、より強い高速道路の工法につなげたい。

むすび塾では情報発信に課題があると感じた。自分の研究も学会発表だけでなく、ＳＮＳなども活用して、幅広い年代の人に知ってもらえるようにしたい。

（北海道新聞・沼田麻緒）

楽しみ学べる防災に

学生団体「玄海」共同代表　神奈川県金沢総合高1年　橋本　玄さん（16）

地元の鎌倉市内では2019年9月の台風15号（房総半島台風）の際、土砂崩れで孤立する住宅が出た。被災地域を訪ねて住民にインタビュー、当時の状況や危険箇所などをユーチューブで発信している。

趣味のキャンプの技術を生かした防災講習で、災害時に役立つ「アウトドア避難」の工夫なども伝えている。とにかく命を守る、そしてまちを守りたい。

そう考えるようになったのは、東日本大震災で被災した人との交流で「自分のまちは大丈夫？」と問われたことがきっかけだ。

むすび塾に参加し、「防災は全ての人に必要」と気付かされた。子どもや高齢者にさまざまな視点で伝え、楽しみながら取り組めるようにしていきたい。

（神奈川新聞・渡辺渉）

ＩＴ活用で命を守る

サンロフト（静岡県焼津市）主任　小林　大介さん（30）

ＩＴ企業で総務・経理部主任を務めている。むすび塾を機に自分の防災の知識や意識が高まった。熱意を持って防災に取り組まれている参加者の存在も知ることができて良かった。

雁部さんの「被災するまで本当の津波を知らなかった」という実体験に基づく言葉が衝撃的だった。自分が想像している津波は現実の津波とは違うことを突き付けられた。だからこそ仮想現実などのＩＴ技術を活用した防災の普及に取り組む必要があると感じた。

ＩＴ企業としてクライアントの防災訓練を手伝ったり、必要な情報を提供したりもできると思う。防災をＥＳＧ（環境・社会・企業統治）に組み込み、ステークホルダー（利害関係者）と共に取り組みたい。

（静岡新聞・鈴木誠之）

中高生 意識高めたい

名古屋大防災サークル轍代表　坂上野々香さん（20）

所属するサークルでは、児童福祉施設で防災教育をしたり、ＳＮＳで防災情報を発信したりしている。コロナ禍で被災地に行けないが、今は勉強して皆で防災の知識を身に付けたいと思う。

むすび塾では、同じ世代の話を聞いてすごく刺激になった。インスタグラムなどいろんなメディアを使って防災の取り組みを広める方法は参考になる。愛知県でも中高生の防災意識をもっと高めたいとも思った。

「車輪の跡」を意味するサークルの名前「轍」は、過去の人が残したことから学び、同じような被害を受けないようにすることが由来だ。今後起きると言われている巨大地震に備え、災害で悲しむ人を一人でも減らしたい。

（中日新聞・横井武昭）

関心事入り口に学ぶ

関西大学生団体KUMC　防災教育班代表　牧野　葵さん（20）

KUMCは東日本大震災のボランティア活動をきっかけに発足し、小中学生を対象に防災授業を行ってきた。2018年の大阪北部地震では、小学校のブロック塀倒壊による児童の死亡、電車の長時間停止や交通渋滞など、さまざまな課題が浮き彫りになり、授業では自分の経験も交えて地震から身を守るすべを伝えている。

市役所から高齢者対象の防災講座開催の依頼を受け、何ができるか悩んでいた。他の参加者の話を聞いて、防災を前面に押し出すのではなく、高齢者なら健康づくり、子どもならクイズや遊びなど、関心事を入り口に災害の話をする工夫を学んだ。子どもと高齢者が一緒に避難訓練をするアイデアも行政に提案したい。

（毎日放送・亘佐和子）